

論文審査の結果の要旨

令和元年 7 月 22 日

申請者： 周 亜芸

論文題目： 中国における留守児童共同体生態場構築の探求
－対話的問題提起学習を援用して－

本提出論文は、問題提起学習という識字教育の領域で開発されその実効性が示検証されてきた学習方法を援用して、留守児童経験者である筆者と現留守児童及び筆者同様過去の留守児童との間で1対1の対話を複数回繰り返すことで、社会的言説として否定的に語られる留守児童経験を共同で意味づけることにより、社会からの規定に自己を合わせるのではなく、逆に社会を規定し返す社会変革の主体として自己を確立していくことを、対話テキストの意味分析により提示した実証研究をまとめたものである。

本審査委員会は、本論文に対して、主に、以下の点から評価をした。

1. 留守児童経験が学業成績から素行に至るまでの様々な側面に及ぼす負の影響や教育的介入による学業面・心理面・素行面における改善効果などを探る研究が多くなされてきた。これらの先行研究の暗黙の前提は、留守児童を社会的文脈から切り離し、救済の対象としていることである。一方、本研究は、留守児童同士が対話を通して共同で自らの留守児童経験を意味づけることを通して、自身と社会のつながりに気づき、社会の変革の主体として自己を位置づけることが明らかにされた。また、本研究の主体であり、同時に、一方の対話者でもある筆者を、本研究では、研究対象者と同じように観察の対象として、筆者における意味付けの変容についても分析を行った。以上から、本研究は当事者研究として位置づけられ、留守児童研究に新たな展開をもたらす研究として高く評価される。
2. フレイレの提起した問題提起学習は、日本語教育に導入され対話的問題提起学習として特に異文化間学習としての展開をみせてきた。それに対し、本研究は留守児童研究の領域にこの方法を導入することで、言語のもつ力の意義が再確認された。その意味で、他の研究領域の知見を消費するだけという批判を受けてきた日本語教育が、本来は社会学の領域である留守児童研究の進展に貢献できることを示すことができた点が評価される。

本審査委員会は提出論文に対して一様に高い評価を与えた。令和元年7月8日(月)、東京紀尾井町キャンパスで実施した口述審査会においては、PPTを使って本研究の要点を的確に構造化して提示した。また、審査委員からの質問については細部にわたるまで詳細な説明を行い、適切な応答を行った。

提出論文も口述審査も満足すべきものであり、博士の学位に十分値するものと判断して合格とした。

審査員(主査): 人文科学研究科 田中 由美子
審査員(副査): 人文科学研究科 岡崎 眸
審査員(副査): 人文科学研究科 野々口 ちとせ
審査員(副査): 人文科学研究科 Jordan Smith